自転車旅日本一周二〇二二年

酪農家　吉川友二

『高橋源一郎の飛ぶ教室』というラジオ番組を「らじるらじる（ＮＨＫラジオ放送の聴き逃しサービス）」で聴いている。二〇二三年一月二十七日の放送で十六歳の高校一年生の娘さんのお母さんから、「娘がロシアのウクライナ侵攻以降、平和を願う気持ちが強くピースマークのネックレスをいつも身に着けている。眠れない夜もあるようである。源一郎さんが「どうしたらいいか、わからない時は本を読むといい」とおっしゃっていたと思うのですが、こんな娘になにかお勧め頂ける本があれば教えてください」という内容の相談があった。ウクライナでの戦争に思いを寄せて、眠れないくらいにこころを痛めている日本の若者がいるのだ。

二〇二一年の自転車旅、十二月十四日のことである。兵庫県と京都府の境界の峠を越えて、京丹後市の久美浜湾にある豪商稲葉本家の邸宅を見学した（『噴煙第四十四号』参照）。邸宅の中を歩いていると、「宝蔵」と呼ばれる狭い土蔵のような部屋があった。宝蔵には太平洋戦争で亡くなられた稲葉家の長男と次男の記録が展示されていた。次男はビルマのインパール作戦で戦死、兄は弟の戦死の直後に出征をして沖縄戦で戦死された。

そこの空間だけ太平洋戦争の時代の時間がまだ流れているようであった。それはロシアのウクライナ侵攻の予兆でもあったのだろうか？　年が明けて二〇二二年二月四日に開幕をした北京オリンピック。ニュースではロシアがウクライナに侵攻をすると何度も繰り返し報じていた。私はいくらプーチンでも戦争をするほど馬鹿じゃないだろうと、ニュースを信じていなかった。ところが二月二十日にオリンピックが閉会すると、宝蔵での体験がまだ生々しかった二十四日にロシアはウクライナへ侵攻を始めた。そして戦争は一年もたった今でも続いていている。

私は敗戦後十九年たった一九六四年に生まれた。小さい時より、お国のために死ぬという過ちを繰り返してはいけないと教わってきた。人一人の命は地球よりも重い、ましてや国よりも重たい。そんな自分の常識とは全く違う人たちがいるのだ。日本で戦国時代が終わったように、世界でも戦国時代を終わりすることは可能なのだろうか。

軍事力のために使っているお金を、福祉、教育に使ったら、どれだけ人々は豊かに生きることができるのだろうか。地球温暖化の問題を考えたら、未来の子供たちのためにも戦争をしている場合ではないのに。

今回の自転車の旅は、二〇二二年の十二月十一日から十八日まで、石川県の小松市から能登半島をまわって新

潟市までを走った。この時期の日本海岸は雪が心配である。どうしようか迷っていたが、妻の「黒部ではホワイトクリスマスは滅多にない」の一言を聞いて、前回の旅の終着地の小松から引き続いて日本海岸を北上することに決めた。妻の実家は黒部である。両親は今は引退されたが米農家をしていた。

旅の準備を始めた。七年も使ってパンクも二回している自転車のタイヤを交換した。今までのタイヤよりも少し太くてゴムの素材がかなり柔らかい。雪の上でも滑りづらそうである。十二月三日に雪が降ったので、翌日に早速、雪道でタイヤを試してみることにした。家から芽登へ降りていく坂道を気持ちよく飛ばしていると、路肩の段差の雪で滑って頭から道路に投げ出された。妻と子供が上からちょうど車でやってくるところで転ぶ瞬間をしっかりと見られた。転んでショック症状であることは自覚していたが、上りも楽しみたかったので、慎重に芽登まで下って上り返した。

石川県のお天気予報を見ると、旅の間中ずっと雨か雪である。今まで父のおさがりの合羽を着ていたが、ゴアテックスの合羽、それと防水手袋、防水シューズカバー、あちこち破け始めていた自転車のバッグをネットショップでポチッとする。秋には札幌に行く用事があったので、秀岳荘で一人用のテントとシュラフカバー（シュラフ（寝袋）を包む防水の布カバー）手に入れておいた。今までテントとシュラフカバーは近くに住む山男の宍倉君に借りていた。

十二月九日

搾乳牛四十六頭全頭を乾乳に上げる。今年も春からお疲れ様でした。無事に一シーズンを終えることができた。

十二月十日

今朝から搾乳の作業がない。荷物のパッキングをする。サラダビーフ（我が家で草だけを食べさせて育てている牛）と茂喜登豚（もきとぶた）（しあわせチーズ工房で出たホエーで育てている豚）のひき肉でペミカン（お肉を炒めてラードで固めた保存食）をつくり。一日ごとに分けてビニール袋に入れる。無洗米を一日三百グラムごとに分けてビニール袋に入れる。そしてそのお米の袋に干しエビ、乾燥をしたみそ汁の具、塩昆布など、家にある乾物をすべて出してきて、日によって味が変わるように入れる。旅の晩と朝のご飯は、お米とペミカンを一緒にコッヘル（キャンプ用のお鍋）に入れて炊く炊き込みご飯である。おかずはない。

十二月十一日（日）
足寄町から小松市

三日に雪が降ったがそれほど積もっていないので、放

牧地に乾草をまいて夜だけ牛を放牧地に出している。朝の仕事が終わって、出発まで少し時間があったので、散らかした部屋を片付けて掃除機をかける。

帯広空港へ向かう途中、帯広で下宿をしている高校生の娘と会って、スーパーでお弁当を買って食べることにする。お買い物を終えて駐車場から車を発進させようとすると、車の前を歩いていたおばあさんにぶつけてしまう。車を降りてひたすら謝る。おばあさんが車の前を歩いていたのはわかっていたが、いつも運転をしている軽トラの車間の感覚で、発進してしまった。駐車場は私にとって鬼門だ。長野の上田の母のお葬式から帰ってきて、音更の駐車場に車を停めるためにバックをしていて、駐車してある車にぶつけたことがある。

いつまでも動揺が収まらない中、空港まで運転をする。冬を感じさせるどんよりとした曇り空である。それでも雲の切れ間に青空がのぞいていて時々陽が射す。

飛行機への搭乗を待つ間に、長男が働いているフランスのお菓子屋さんがあるアヌシーまでの交通費をグーグルマップで調べてみる。二十三万円で往復できることに驚く。円安なのでもっと高いかと思っていた。飛行機の運賃の比較だけではなく、二酸化炭素の排出量の比較が表示されている。グーグルの社員は地球温暖化の問題にきっと関心が高いのだろう。ＡＮＡの機内誌で社長が飛行時間はかかるけれども燃費の良い飛行機をこれから運行すると書いていた。その機種は翼が窓より上にあるので、眺めが良いそうである。しかし、二酸化炭素の排出量を減らす一番の方法は、飛行機の便数を減らして、座席利用率を高めることだろう。

一つ空席をはさんで窓側の席の四十代くらいの女性が離陸をしてからずっと眠っている。飛行機の高度が下がって、雲の下にでると関東平野が夕日に赤く染まり始めている。

四十分で小松行きの飛行機に乗り換えると、ほぼ満席である。小松空港に着いて、バスの狭い通路に自転車の入ったバッグを押し入れる。バスから外を見ると、空港のビルには小松空港と書かれた赤いライトが暗い夜空に浮かんでいる。小松空港には「鳥取砂丘コナン空港」というような愛称がないようである。

『へんなホテル小松』は小松駅の裏にすぐにある。世界初のロボットホテルだそうで、二頭の恐竜の映像がチェックインカウンターに出迎えてくれる。小松空港に下りて、福井の「恐竜博物館」に行く人が多いのだろうか。

去年、鳥取の倉吉市の食堂のお母さんからいただいた旅のノートが家で見つけられなかったので、代わりのノートを買いに本屋さんに行く。小松空港の裏はすぐに住宅地になる。大きな建物の中にある「ツタヤ明文堂」に入ってすぐにリングバインダーのノートが見つかる。本屋さんはとても広くて、本の展示の仕方が独特で凝っている。

明日からは自転車の旅なので、本は買えないけれども、店内を一回りすることにする。韓国の受験指南書を見つけて手に取る。今年は私にとっての韓流ドラマのブームの年であった。『愛の不時着』は繰り返して二回も見てしまった。ドラマの出来栄えに感心をして四、五作続けて見て、今は見なくなってしまった。韓国も日本以上に受験競争が大変みたいだから、受験の本も韓国には一杯ありそうである。本の帯に「勉強は「頭」でなく「心」でするもの」と書いてある。なるほどー「心」でするのか。心で勉強をするなんて考えたこともなかった。

「勉強」といえば、福沢諭吉は「江戸の人は出世のために勉強をするから勉強ができないが、関西人は楽しいからやっているので勉強ができる」と言っていたと聞いたことを思い出す。

「心」といえば、夏目漱石の『こころ』をまず思い出す。高校の教科書に載っていた。この『こころ』に出会ったために、誰でも無邪気に信頼をする私の性格は少し暗くなった。

無心と言うけれども、楽しいとき、順調な時は心の出番はないが、苦しくなると心の出番がやってくるのだろうか？

十二月十二日

小松市から羽咋（はくい）市

日の出とともに出発をしようと思っていたのだが、もたもたしていたら、外はすっかり明るくなっている。小松駅のすぐ裏には小松製作所の作業機械が展示されている。

市街地から海へ向かって走る。郊外の宅地の入り組んだ道を走っていると、「松井秀喜ベースボールミュージアム」の立派な建物がある。残念ながらまだ開館前の時間である。轟音が聞こえる。飛行機かと思って見上げると戦闘機である。小松基地って名前を聞いたことがあるが、航空自衛隊の基地があるのだろう。

海に出ると加賀海浜自転車道がある。海浜と名前が付いているだけに、海の砂浜に沿って道がある。砂の吹き溜まりがところどころにあり、自転車を引いて歩く。自転車道の陸側の上には、風を防ぐためだろう、丸太で組んだ柵が要塞の砦のようである。自転車道はかなりデコボコだが、新しいタイヤは乗り心地が柔らかくて快適である。タイヤでこんなにも自転車の乗り味が変わるのが新鮮だ。

海岸線の防風林の松林の中に、松の木を玉切りにして積み上げた小山がいくつもいくつもあり、それが透明なビニールでしっかりと被われている。これを作るのは大変な作業である。（ここから先の松林の中にも同じ小山

を見かけたが、多分松の木の病気の感染を防ぐためだろう。）

走っているとVaundy（バウンディー）のMabatakiという曲が頭の中をグルグルと回り始める。去年はYUKIのJoy、その前は平井大のなんという曲だったっけ？　韓国では受験シーズンになるとヘビーローテーションしてしまう曲のベストテンを募集するのだそうだ。私は三浪をして四回も大学受験をしているが、受験の最中に頭の中で同じ曲が流れ始めて止まらなくなったことがある。あまり聞かない曲だったので、なんでこの曲かと不思議であった。

加賀海浜自転車道の終点で、金沢の町へ行く道と、海岸を行く道の分かれ道がある。兼六園に行ってみようか、どうしようかと道の縁石に座ってしばらく地図とにらめっこをする。

大学の四年生の春休みに兼六園に行ったことがある。実は無声堂を見るために行ったら、隣が兼六園であったのである。無声堂とは作家の井上靖さんが柔道に明け暮れた青春時代を過ごした旧制四高の武道場の名前である。『北の海』という自伝的な小説に描かれている。

無声堂は兼六園の隣にある金沢大学の中にある。金沢大学は金沢城の跡地の中にあり、城門が入り口になっている。兼六園に来ている観光客たちが城門から中に入らないように警備員が注意をしている。どうしたら中に入れるかなあと考えながら、兼六園をぶらぶらとする。富山の立山に登りに行った帰りに寄ったので、でかいザックを背負って、手にはスキーを抱えている。雪焼けで顔は真っ黒であったろう。無声堂を見たいから入れてくれないかと警備員さんに頼んでみようと近づいていくと、警備員さんは私が何も言う前に入れてくれた。

今、ネットで調べてみると金沢大学は一九九五年に郊外に移転をして、今は金沢城公園になっている。そして無声堂は愛知県犬山市にある『博物館明治村』四丁目に移築されて展示されているらしい。

兼六園にはまた次の機会に行くことにする。ドラッグストアがあったのでガスボンベを買いに入る。明日からの雨に備えて衣類などを包むためのビニール袋も買う。お買い物をしていると妻の叔母さんの二三子さんから電話がくる。二三子さんの家の近くを通るので、お会いできないかと電話にメッセージを入れておいたのだ。二三子さんにドラッグストアから見える病院の名前を言うと、当然知っていますといった調子の返事が返ってくる。不思議に思っていると、どうも二三子さんの家のすぐ近くにいるようだ。

二三子さんの家には家族でお邪魔をしたことがある。二〇一一年に「ツール・ド・のと四〇〇　能登半島一周

サバイバル・サイクル」という自転車のイベントに参加した。自転車を始めた年の翌年で、自転車に乗ることがとても新鮮であった。その熱でこの三日間のイベントの最後の一日に参加をした。その時のスタート地点が能登島でゴールが内灘町の二三子さんの家の近くだったのだ。ゴールをした後に二三子さんの家のお風呂で雨で冷えた体を温めさせてもらった。家は河北潟（かほくがた）の岸辺にあり、子供たちは庭にいくつも開いた穴から出てくる大人のこぶしくらいの大きさのカニを捕まえるのに夢中であった。

二三子さんがお昼ご飯にスパゲッティを作ってくれる。若い時にご夫妻で北海道を歩いて回ったことを話してくれた。自分も自転車で旅をしてみたいと言ってくれる稀な人だ。これから荒れる天気予報を知らないせいもあると思う。家の前から、見えなくなるまで見送くってくれる。

海に出ると、能登海浜自転車道が始まる。自転車道は海岸線を走る高速道路の脇に造られている。今日はほとんど一日中自転車道を走っている。これだけ自転車道が整っているところは初めてである。自転車道は車の心配がいらないので、走っていて気楽である。けれども周りに何もないので、一日中走っていると、何か物足りない感じもする。

暗くなる前にはテントを張りたいので、三時になるとテントを張るのに良い場所を探しながら走る。トイレがある原っぱを見つけてテントを張る。ご飯を食べてやることもないので七時半に寝る。自転車旅はテントを張る場所を見つけなければならないという緊張感がある。

十二月十三日（火）
羽咋市から輪島市

夜、バタンという車のドアの締まる音に二、三度目が覚める。

朝四時に起きるとテントが風でゆがんでいる。スマホで天気予報を見ると、七時から雨も降る予報である。今日の予報では最低気温が六℃、最高十二℃、風速は九ｍである。明日の予報は暴風雨で風速十一ｍ、日中の気温は三℃である。あさっても暴風雨、日中の気温は四℃、風速十ｍの予報である。

二三子さんにお願いをして家に泊めてもらって、二日間金沢の図書館にこもって一日中、本を読んで過ごすのも魅力的である。金沢に引き返すことにする。雨が降り出す前に少しでも走っておこうと四時半にテントの中でヘッドライトをつけてパッキングを始める。荷物をまとめていると、風でテントが横倒しになる。

一時間ほど走って道の駅「能登千里浜」を過ぎたところで空を見上げると、月が顔をのぞかせている。星が所々にまたたいている。能登半島に取って返すことにする。

往復で二時間ロスして昨晩テントを張ったところに着く。ここから、羽咋（はくい）健民自転車道が始まる。地図を見ると、この自転車道は北陸鉄道能登線跡地に造られたそうだ。遠く行く手の海岸に稲妻が光って見える。

自転車道が山へ入っていくところで、海岸線の一般道を行く。巨大な建物が建っている敷地に車が吸い込まれていく。ちょうど通勤の時間なのだろう。地図を見ると志賀（しか）原発である。こんなところに原発があるとは知らなかった。写真を撮ろうと思ったが、雨の中、手袋を脱いでまたつけるのが大変なので原発の前を走りすぎる。雨の日は手袋を合羽の袖のすその下に片方は手袋をしたまま入れ込まなければならないので、手袋を脱いだり着けたりするのが大変なのである。

峠の坂を上っていると、バス停の地名の漢字が読めなかった拍子に、俳句もどきが頭に浮かんでくる。季語も知らないが、思い浮かんだ俳句もどきを添削しながら走る。普段俳句など思い浮かぶことはないのに、上り坂で脳が酸欠になっているからだろうか？同じ曲が脳内を循環再生するのも、同じ理由からだろうか？

地図を見ると通り道近くに總持寺（そうじじ）がある。曹洞宗の本山の總持寺は横浜にあるのではなかったっけ、と思いながら、通り道から近いので寄ってみる。

總持寺では、二十人くらいの老若男女の入り混じった団体のお客さんが、案内の方の解説を聞きながら歩いている。靴を脱ぐ必要がないと言われてホッとする。団体の後について、案内を聞きながら伽藍をめぐる。

明治時代に火事で能登の總持寺が焼けて、横浜に移転したのだそうだ。僧堂の中をのぞくと、薄暗い広間に整然と並べられた厚い座布団の紫色が光って見える。起きて半畳寝て一畳の修行の世界だ。僧堂では瑩山禅師のいた七百年前と変わらない修行の生活が今も続いているのだろう。去年は曹洞宗の祖の道元禅師の開いた永平寺を通り越して、『福井恐竜博物館』に行ってしまったので、今回總持寺祖院に行けたのも何かの縁かもしれない。

峠道の上りと下りを繰り返して、海岸の河口に出ると、竹で編んだ垣根が二階の家の屋根まで届くような高さまで家の前にめぐらされている。案内板によると、これは「間垣」と呼ばれて、冬の風、夏の西日から家屋を守るためだそうだ。ここの海岸で河口の微地形は、他にはない間垣を作らなければならないほどの厳しい気候なのだろう。

道の防波堤に波が当たって水しぶきとなり、霧状になって眼鏡を濡らす。上り下りの激しい海岸線の道になる。海からすぐの深い谷にかかる橋の下に家が二、三軒建っている。この家に日が当たるのは数時間であろう。

輪島の街に着く。スマホを充電させてくれる食堂を探して行ったり来たりする。食事を済ませて、食堂を出るときには三時になっている。これから天候がますます悪

化する予報なので、先へ進まずに輪島で宿を探す。スマホで調べると、「梅の家」といゲストハウスが安くて評判が良い。口コミを読むと、無料の温泉券も貰える、バイクを置く倉庫もある。スマホで予約を入れる。

十二月十四日（水）
輪島市から能登町

朝方だろうか、外の物音で起きる。中庭に打ち付ける雹の音のようである。

六時前にヘッドライトをつけて出発をする。今はそれほど風が強くはないが、これから防風雨の予報である。

明るくなるにしたがって風が強くなってくる。冬の風の基本は西風なので、計算通り追い風となっている。一度駐車場から出るために反対方向へ進んだら、自転車に乗ることもおろか、歩いても前に進むのが大変なほどの風である。地形のせいで風向きが突然変わったり、突風が吹いたりしてハンドルが捕られる。路肩にいたシロサギが自転車に驚いて舞い上がると、あっという間に右手の崖の上に吹き飛ばされて小さくなっていく。シロサギはいつ地上に戻れるのだろうか？

道の上から海を見下ろす傾斜に、等高線に沿って細長い田んぼが海の間近まで階段状に続いている。冬の天気の悪い早朝であるが、畔がライトアップされて縁取りされている。白米町（しろよねまち）の「白米千枚田」である。千枚田を見下ろす所に駐車場がある。駐車場の柵に自転車を立てかけて写真を撮ろうと雨の中にもかかわらず手袋を取っていると、強風で自転車が倒される。

海の堤防の上の道を走っていると、波の花が道まで舞い上がってくる。波の花が道の上に積もっている所もある。

能登半島が南へと折れ曲がる半島の先端にある道の駅「狼煙（のろし）」に着くと、朝からの激しい風が嘘のように穏やかである。九時少し前であったが、道の駅が開いていて助かる。地元の卵を使ったという立派な大きさのカステラ（¥八百）を買って、コーヒーをお願いする。事務机の事務椅子に腰をかけていただく。

海岸の道には海が荒れた時に、通行止めをするためのゲートが何か所かある。風は弱くなったが、時々突風が吹く。自転車旅で一番大切なことは転ばないことだなあと思う。転んで新調したばかりの合羽も破りたくないし。

珠洲飯田（すずいいだ）の町でお昼ご飯を食べる。街の中でおじいさんが自転車に乗っている。こんな雨風の中、自転車に乗っているのは私だけかと思っていたら、お年寄りはたくましい。

薄暗くなってきた頃に「能登七見（しちみ）健康福祉の郷なごみ」温泉に着く。隣に広場があり、トイレもある。朝からお腹の調子が悪いのでトイレのそばの天場を探していた。温泉の事務所の人にテントを張っていいの

かと聞くと、「隣の広場は県の管轄だからわかりません」と言われる。これは「テントを張ってもいいよ」ということだと勝手に解釈させてもらう。

トイレの近くにテントを張って、温泉に入りに行く。温泉に浸かっていると、今日一日中、防風雨の轟音の中を自転車で走っていたことが夢のようである。サウナの中では（方言略）「サワラ八百キロ獲れた。八キロの大きなものもあった。」「イワシが獲れた。キロ八百円だ。高い、高い。」「ブリが獲れない。」「北海道で獲れている。」漁師さんたちの会話に聞き耳を立てる。サウナでの会話はそこがどんな地域かがわかって面白い。

お風呂から出て、休憩室のテレビでお天気番組の雲の映像を見ていると、網の目のようになった雲が、西から東に流れている。雨が降ったり止んだりを繰り返していたのはこの網の目状の雲のせいだ、と映像を見て納得する。

七時にテントに帰って寝る。お腹の調子が悪いので夕食は作らない。風でテントがあおられると思ったが、海から一〇〇メートル位の崖の上にある天場まで、崖にびっしりと木が生えていて、風を防いでくれているからだろうか、風の音だけが聞こえる。

十二月十五日（木）

「能登七見（しちみ）健康福祉の郷なごみ」から道の駅「氷見（ひみ）」

夜中に寒くて目が覚める。ダウンのチョッキを着て寝直す。また寒くて起きる。合羽の上下を着込んで寝る。それ以降も朝まで眠っては寒くて起きるを繰り返す。

五時半に目を覚ます。食事をせずに、パッキングをして六時半に出る。みぞれが降っている。朝走り出して間もなく、海岸から山へ入る道を上り始めたところで、変な音がする。自転車を調べてみると、タイヤの空気がだいぶ抜けてタイヤがへこんでいる。みぞれの降る中、手袋を取ると手もかじかんでしまうので、パンクの修理はやめて空気だけをポンプで入れる。みぞれが止んで、あられが降ったり止んだりの天気に変わる。道には一センチ位のびしゃびしゃの雪が積もっている。峠への上りが急になってきて、「ホテルニューヨーク」の看板を見たら俳句もどきがまた頭に浮かんできて、それを推敲しながら走る。

峠の下り道にシャーベット状に雪が積もっている。上ってくる対向車がカーブですべっているのを見て、慎重に下る。峠を下ると穴水町（あなみずまち）の入り江に出る。入り江は波もなく、鏡のようである。入り江にやぐらが組んであって、その上に人形が座っている。看板を

見ると、「ボラ待ちのやぐら」といって、ボラがやってくるのをやぐらの上で待って漁をする漁法の展示である。平成に入るまで行われていた漁法だが現在は行われていないそうである。

能登半島の中央部の東側に七尾湾がある。その七尾湾に能登島は包み込まれている。日本の海岸線は芸術的である。「ツインブリッジのと」を渡って能登島へ行く。能登島を半分、周るつもりでいたが、道を間違えて、能登島大橋へとまっすぐに行ってしまう。橋の手前で突然雹が降ってくる。

能登島大橋からは「ツール・ド・のと」で走ったことのある道なので、見覚えがないか注意をしながら走る。「ツール・ド・のと」の時には波しぶきが道までかかっている所があった。

七尾港にある道の駅「能登食材市場」でラーメン定食を食べ終わって自転車に乗ろうとしていると、道の駅の方が来て話しかけてくれる。夏はこの道の駅の周辺でテントを張る人もいるそうだ。道の駅にテントを張るのは原則禁止であるが、あまり気にしなくても良いのかもしれない。

七尾湾から峠を越えて富山湾に出て、能登立山シーサイドラインを南下する。

氷見（ひみ）市に入る看板には、ぶりが波の上を飛び跳ねている。海岸線に沿って細長い公園がある。公園を走っていくと道の駅「氷見（ひみ）」がある。今まで見た中で一番立派な道の駅である。道の駅の近くには立派な温泉もある。この公園でテントを張ることにする。テントを張っていると、犬とお散歩をしていたお母さんが、寒いでしょうにと声をかけてくれる。風でテントが飛ばされないようにテントの張り綱をあずまやのベンチに縛り付けて温泉へ行く。

お風呂の後に食堂で氷見うどんを食べ、濡れていた靴下も乾かすことができた。

公園のトイレに入ると、とても立派なトイレなのに、座椅子ではないトイレなのでびっくりする。ここに来るまで、山の中の道の脇にある、おんぼろのトイレにまで座椅子でウォシュレットが付いていて驚いていたのだが。ああ、そうだ。氷見市から富山県になったからだ。きっと石川県は観光を推進するためにトイレのウォシュレット化を進めたのだろう。トイレを良くしたのだから、あとは百メートルおきに選挙ポスターを貼るのを禁止すれば完璧である。

十二月十六日（金）

道の駅「氷見」から黒部市の妻の実家

昨夜は合羽もすべて着こんで寝た。そのおかげで寝る

ときには心地よく眠れたのだが、それでも夜中に寒くて目が覚める。帰ったらすぐに旅の装備表に寝袋二つと書いておこう。寝袋を二つ重ねて使えば今度こそ温かく眠れるだろう。去年の旅の時も寒くて眠れない夜があったので、次回は寝袋二つ持ってこようと同じことを考えていたはずだ。

朝、雨混じりの風が強くてテントがたためない。手袋を脱ぐと手がかじかんでしまう。手袋をはめたままでは、フライ（テントの上にかける防水布）もテントからうまく外せない。濡れたフライとテントを一緒に丸めてバッグに詰めこむ。

昨日までは、雨や雪は降ったり止んだりしていたが、今日は朝から雨が降り通しで降り止むことがない。一般道路に引かれた、自転車のための青い線に導かれるままに走っていると、幅の広い川がある。あたりを見渡しても渡れそうな橋はない。それでも青い線を信じていくと、目の前にエレベーターがある。見上げると、上に橋が架かっている。この橋の上まで行くためのエレベーターのようだ。エレベーターで上ると、橋の上の車道の下に造られた歩道がある。歩道の両側には雨風が吹き込まないように、そして景色も見られるようにアクリル板が張られている。歩道を歩いて対岸まで行くとエレベーターの入り口の張り紙に県営の無料の渡し船の時刻表が貼ってある。渡し船も楽しそうだ。

富山市から滑川（なめりかわ）市へと「しんきろう自転車道」（滑川市は蜃気楼が有名である）がある。自転車道を走っていると、一般の道と交差するたびに、一時停止の標識がある。五十～百メートルおきに止まらなければならない。なぜ自転車道があまりないかがわかった。町の中では自転車道と一般道との交差ができるので、自転車道が寸断されてしまうからだ。そのせいで今まで走った自転車道はすべて、海岸沿いか高速道路沿い、または鉄道の線路の跡地にあった。

富山市街へは行かずに海岸を走る。子供たちがまだ小さかったときに何度か来たことのある魚津水族館の前を通り過ぎる。少しでも近道をしようと、雨の中にもかかわらず、手袋を外してスマホを取り出して妻の実家までのルートを調べる。妻の実家は石田野（いしだの）という海を見下ろす高台にある稲作地帯である。石田野への坂道がかなりきつく感じられる。まだ午前中しか走っていないので、それほど疲れてはいないはずだが。

お義父さんとお義母さんはお出かけ中である。家に荷物を置いて、新川（にいかわ）育成牧場に行ってお昼ご飯を食べようと、お店が開いているかスマホで調べる。新川育成牧場は「くろべ牧場まきばの風」と名前が変わっている。牧場までは二キロほどの上り坂である。自転車

を空荷にしたので、軽快に上っていくはずだったのに、ちっとも軽くなった感じがしないのを不思議に思いながら走る。道に雪はなかったが、「くろべ牧場」から見下ろすと、牧草地は雪で真っ白である。誰もいない大きくてきれいなお店でカレーを食べる。足元を見ると、床に水たまりができている。

家に帰ってタイヤのパンクを修理する。玄関の脇にいつも置いてある桶がある。桶の水の中に空気を入れたチューブを浸けて、あぶくが出る所を探す。半日で空気が抜けるほどの小さな穴だから、なかなか見つからないのではと思っていたが、すぐに見つかる。穴は目を離すとわからなくなるくらいの穴である。チューブの穴の位置をタイヤに合わせて、タイヤの穴を見つける。二センチ位の細いワイヤーがタイヤに刺さっている。タイヤの路面に接する部分には、耐パンクのベルトがあるのだが、その脇に針金が刺さったのだろう。

家の前でパンクを直していると、一匹のサルが目の前を走っていく。私を見て逃げたかと思ったら、すぐに三、四匹の猿が屋根の上から現れる。興奮をしているようだ。攻撃をしようとしたのか、馬鹿にしたのか、玄関の屋根の庇の下に昔からあったバスケットボールくらいの大きさのスズメバチの巣を下に落としてくる。こちらも石でも投げて攻撃をして追い払ったほうが良いのだろうか？攻撃をしないほうが良いのだろうかと、ドギマギしている間に姿を消した。

両親が帰ってきて、お義母さんは畑にサルの被害を確認に行かれる。居間にポータブル温風ストーブを出してくれる。最初は部屋が汚れてしまうから遠慮をしていたが、新聞紙をもらってストーブの前に敷いて濡れた靴、靴下、手袋を乾かさしてもらう。

お風呂に一番先に入らせてもらい、富山の日本酒と昆布〆のお刺身、電気敷毛布を敷いたふかふかのお布団。これを極楽と呼ばずしてなんと呼ぶのであろう。

おとうさん、おかあさんありがとうございます。

十二月十七日（土）

黒部市から柏崎市

石田野の家を六時半に出発する。明日から大雪になる天気予報である。今日のうちに行けるとことまで行きたい。石田野から海岸には下りずに台地の上を海を遠くに見下ろしながら「新川（にいかわ）スーパー農道」を行く。お日様は東に連なる山々の陰になっていて、いつまでも姿を現さない。

細長い田んぼが道に沿ってある。白米千枚田（しろよねせんまいだ）で感じた違和感が何なのかがわかる。棚田と言ったら、母の教えてくれた逸話の「自分の田んぼ

の数を数えて一枚足りないと思って探したら、蓑の下に隠れていた」という逸話のような小さな田んぼである。ここの棚田は扇状地形にある細長い棚田である。

富山から新潟へ抜ける道は、県境にある親不知（おやしらず）の断崖が険しい飛騨山脈・北アルプスに続くので、海岸線の道一本しかない。県境に近づいてきて台地の道から海にでると、波が堤防にぶつかったしぶきが舞い上がって、霧になって立ち上っている。行く手の海岸線は波しぶきで出来た靄（もや）に包まれている。

新潟県に入る手前にヒスイ境海岸がある。ここには夏休みに帰省をすると必ず泳ぎに来る場所がある。岩場の海を偶然に見つけたのだ。ここにはたいがい私たち家族しかいなかった。落ちている針と糸を拾って、泳いで魚を見ながら釣りをした。北海道ではなかなか海で泳げないので、夏休みに富山へ帰省をするのは子供たちに海を体験させるのが目的でもあった。初めて富山で泳いだ時には、何も知らずに裸で泳いだので、強い日差しでみんな火傷をして、お風呂に入れなくなった。

新潟県は看板の朱鷺が出迎えてくれた。県境を過ぎると、道は長い上り坂になって、親不知の崖の上に出る。親不知のトンネル（天険トンネル）の手前に、標識があり、トンネルを迂回する道がある。トンネルを自転車で行くのはいつも恐怖であるので、ありがたく迂回路を行くことにする。

廃道になっている道を行くと、親不知の海岸を見下ろすことができる断崖の上の手すりに「ブラタモリ撮影場所」と書かれたタモリさん一行の写真がくくり付けられている。ここからの道は観光客の遊歩道として整備されている。この道は明治十六年に開通して、昭和四十一年まで国道として利用されていたそうだ。この道ができるまでは、旅人は命がけで、断崖の波打ち際を走って渡っていたそうである。

糸魚川市の市街を過ぎると「久比岐（くびき）自転車道」が始まる。海岸を走る車道からは一段高い山側にあって、車と海を見下ろしながら高い所を走る気分がいい。道もきれいに整備してあって、道の上に立っているだけで気分が盛り上がる。

能生（のう）の市街に入ると自転車道が途切れて、一般道に線の引かれた道になる。線で引かれた自転車道を離れて、能生の駅になにか幼いころの思い出がないか確かめに行く。

海なし県の長野県に生まれた私にとって、夏休みに一年に一度の家族旅行で行く場所が能生であった。民宿で一泊して海で泳ぐのである。海だけが目的であったら、谷浜が一番近いのだが、両親はなぜ能生まで足を延ばし

たのだろうか？

初めての海へ行ったのは何歳の時だったのだろう。列車に乗ったのも初めてだったのだろうか？汽車の中から窓の外の風景を見ると、なぜか田んぼがグルグルと回っている。じっと見ていると気持ちが悪くなってくる。父に田んぼが回っていて気持ちが悪いと言うと、近くを見ないで遠くを見たらいいと言われてその通りにすると景色が回らなくなった。カチカチの冷凍のミカン。お茶を売っていることにびっくり。四角いポリ容器の急須が熱さでぐにゃぐにゃである。

海岸を走るタクシーに乗っていて、あれが海だよと言われて遠くに海を見る。タクシーのメーターが上がる度に大きな声を上げて、母にたしなめられた。「またあがった！」とでも叫んでいたのだろうか？

民宿から狭い路地を抜けていくと海の岩場がある。他のお客さんは誰もいない。浮き輪をつけて泳いでいても、海の底に引きずり込まれるような恐怖感。空気で膨らませるビニールのいかだに兄と私を乗せて、いかだの紐を肩に引っ掛けて引っ張る父の平泳ぎ。釣りあげても空中で針を食いちぎって逃げる小さなフグ。

こんな記憶の断片というか、幼い時の原体験が自分への信頼を支えて、今まで自分を支えてきたような気がする。

自転車で走っていて、タイヤの空気が抜けないというだけで、こんなに快適だとは。しかし今日はずっとチェーンがきしむ音が気になる。悪天候用のチェーンオイルを塗っておいて、旅の途中でチェーンがきしむのは初めてだ。道の駅「マリンドーム能生」の事務所の年配のおじさんに、潤滑油がないだろうかとお願いすると、おじさんは事務所内をあちこち探してくれるが見つからない。オイルはあきらめて、どこでお昼ご飯を食べようかと、道の駅の中をウロチョロする。道の駅の中だけで四軒くらい食堂がある。

道の駅の外には「かにや横丁」があって魚介類を並べているお店が七、八軒並んでいる。大勢のお客さんで賑わっている。昨年の旅の兵庫・京都の松葉ガニで始まり、福井県の越前ガニ（越前がにミュージアムもある！）、石川県の可能（かのう）ガニ、富山・新潟県のズワイガニと呼び名が西から変っていくカニフィーバーもここで一区切りだろうか？

お昼になにを食べようか、まだうろうろとしていると、事務所のおじさんが、私を見つけて潤滑油のスプレーをもってきてくれる。

自転車道に立派なレンガ造りトンネルがいくつかあって、久比岐自転車は鉄道の跡地に造られていることがわかる。石川、富山、新潟が今までで一番自転車道が整備

されている。
地図に鯨波（くじらなみ）という地名がある。柏崎の手前である。小学六年生の時に一泊の修学旅行で来た鯨波であろうか？鯨波なんて地名は二つもあるわけないし。海へ行くために直江津からこんなに遠いところまで来るのだろうか？ 鯨波の海に見覚えがあるだろうかと、海水浴場まで国道から海まで降りていく道を行く。（後で電車の時刻表を知らべると、直江津から四十分の距離であった。）
柏崎市内に入ったところにある公園にテントを張れる場所がないかと公園内を偵察する。ベンチに腰を下ろしてスマホで天気予報を見ると、明日は朝から雪である。駅前のホテルに泊まることにする。
ホテルに着くとロビーにドナルドキーン記念館でのイベントのポスターがある。フロントの人に聞くと、ブルボンの社長のご夫妻とキーンさんに親交があり、キーンさんの記念館が柏崎にあるのだとのこと。柏崎はブルボンの創業の地であるそうだ。また柏崎は「水球のまち柏崎」と呼ばれているそうだが、水球もブルボンがスポンサーをしているそうだ。駅近くのビルには水球の大きな写真の看板が掲げられている。
テントなどの装備を浴室につるして寝る。

十二月十八日（日）
柏崎市から新潟市

今日は最終日。新潟駅近くに事前に予約をしてあるホテルを目指す。雨対策を万全にした服装で小雨の降る中をヘッドライトを点けて出発をする。
海岸を走る北陸道を行く。海辺に建てられている柏崎刈羽原発を迂回する上り坂を上っていく。結構な距離の上り坂で、汗で合羽の内側から濡れる。かなりの広さの敷地である。原子力発電所のまわりは柵が二重にめぐらされている。そしてその柵の上に張られた鉄条網の螺旋が芸術的である。
海岸線は雨混じりの強い風が吹いている。日本海の白波が押し寄せている。道の駅「越後出雲崎　天領の里」に着く。今日の遅い朝食は、自動販売機の温かい「おしるこ」と「おいしいカフェラテ」である。体を温めて、炭水化物を補給する。
道の駅の近くに、良寛さんの生家跡に建つお堂がある。良寛さんと言えば、子供の時に絵本で読んだ子供たちと手毬をしているイメージであるが、実は良寛さんは若いころにかなり厳しい修行をした曹洞宗のお坊さんだそうである。良寛さんをもう少し知るために近くの良寛記念に行っておけばよかった。
新潟県というと水田の広がる平野というイメージであっ

たが、海岸線の道の右手は急峻な山の壁が続いている。海岸線の遠くにビルが見える。今日初めて見る街らしい町である。寺泊の町であった。町に入ってすぐにあったコンビニで、タンパク質の補給をしようと「テリチキたまごコッペ」を食べる。町中を過ぎたところに、北陸道の右手に沿って二、三百メートルくらい魚介類を扱うお店が軒を連ねている。雪交じりの風が吹く悪天の中、お客さんで賑わっている。道をはさんで海側の駐車場からの人の往来に交通整理のおじさんまでいる。朝テレビで気象予報士が不要不急の外出はしないように言っていたが、今日は師走の日曜日、これくらいの冬の嵐など新潟県民にとっては当たり前のことなのだろうか。

大きなサバ一本の串焼きなど、串焼きはどれも大きい。サバの大好きな私はコンビニで食べたコッペパンを後悔する。お腹は空いていないが、千円のお寿司のパックと漁師汁で体を温める。お寿司はネタが二重にのっているのもある。おいしくて量もありこの値段である。海の近くはいいなあ。

また日本海の白波と原野の景色だけの道になる。みぞれ混じりの風が吹き付ける。汗で服を濡らさないペースで、なおかつ体を冷やさないペースを、探しながらペダルをこぎ続ける。まるで冬山を登っている心境である。新潟の市街地に入る。新潟駅と書かれた標識に従って行く。駅が近くなると、湿った雪が積もっていて道がぐしゃぐしゃなので、自転車を降りて自転車を引いて歩く。

ホテルには二時に着く。フロントでチェックインまで一時間あるので、千円を払わないとチェックインできないと言われる。どこかで一時間つぶす元気もないので、千円を支払う。ホテルの玄関先の水道の蛇口から水筒に水を汲んで自転車に水をかけて自転車を洗う。道路へ吹きだまっていた砂丘の砂が結構ついている。

十二月十九日（月）
新潟市から上田市

今日は兄の還暦の誕生日である。両親が亡くなり、兄一人の住む上田の実家に寄ってから足寄に帰ることにする。

ホテルのまわりはそれほど雪が積もっていないのだが、直江津へ行く越後線、信越本線ともに運休である。鈍行列車に乗って、ゆっくりと旅を楽しもうと思っていたのだが。新幹線は動いているので、新潟から上越新幹線で高崎まで南に下って、高崎から北陸新幹線で北に上って上田に行くことにする。

新潟駅で手提げの紙袋二つに一杯笹団子をお土産に買う。子供の時に新潟方面に誰かが行くと、笹団子のお土

産を期待して待っていた。でも笹団子は滅多になくて、たいがいは笹飴がお土産であった。

上越新幹線には初めて乗ったのだが、長いトンネルがいくつもあり、雪国の景色を楽しんでいる間もなく、のどかにお日様が照っている緑の山里の風景になった。

上田では兄が駅に迎えに来てくれている。お誕生日のケーキを買って、喫茶店に行く。お父さんの時代は五十五歳が定年であったこと、父は若い頃に無理をして仕事をして肺の大きな手術をしたこともあって、早期退職をしたのではなかったか、という話をする。父を考えると、今日が還暦の誕生日の兄はもう大手を振ってリタイヤ生活を楽しめる。ご苦労様でした。私も三日後の二十二日には五十八歳の誕生日である。

冒頭の十六歳の娘さんのお母さんの源一郎さんへの質問の答えが気になるので、『読むらじる』を調べてみると、源一郎さんの答えは、太宰治の作品。太宰治は生涯ずっと戦争中であったから。ゲストの鈴木涼美さんは井上ひさしの『一週間』。伊藤比呂美さんは『鋼の錬金術師』でした。